

陶磁器から見える公家の生活

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

出土の状況 京都御所東側の色濃い緑に囲まれた一帯は、いにしへの都、平安京の北東隅にあたり「染殿」、「清和院」など皇族や貴族の邸宅があった所とされます。江戸時代には多くの公家屋敷が建ち並んでいたことが絵図から読みとることができます。

この公家町にあたる場所で、溝や柱列で区画された宅地の跡から地下式の蔵跡が見つかりました。内部はほとんど焼土で、陶磁器類や瓦などと一緒に埋められていました。江戸時代前期の火事場の後始末でしょう(写真1・2)。

そこからは、遺物整理箱に約26箱分の国産陶磁器、輸入陶磁器、土師器、瓦類、金属製品、石製品などが出土しました。その大半が陶磁器類で占められ、復原できる個体数は330点以上です。

さまざまな陶磁器 国産陶磁器には美濃焼の碗・茶入・香炉・壺、備前焼の瓶・壺、丹波焼の播鉢、

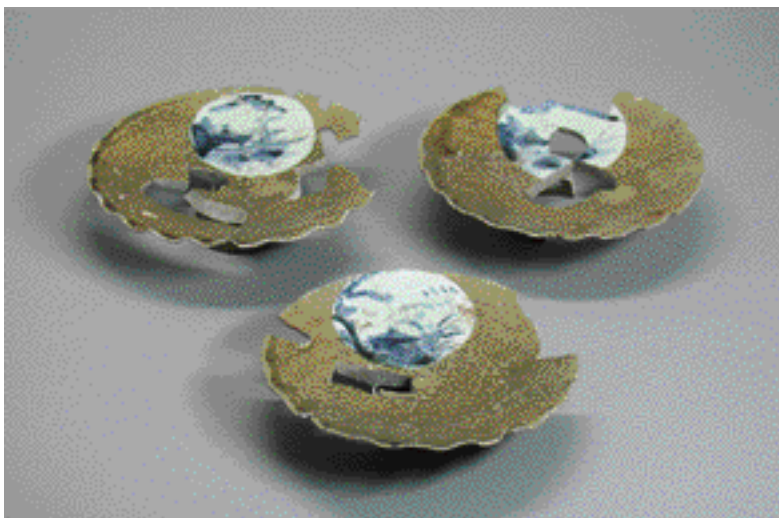


写真6 錆釉染付 皿



写真7 色絵 壺と鉢



写真1 調査地のようす



写真2 蔵跡の埋土



写真4 金彩碗



写真5 皿のセット

京焼の碗、信楽焼の壺、肥前陶器の碗・皿・鉢、肥前磁器の碗・皿・鉢・坏・合子・香炉・瓶・壺などがあります。最も多いのが肥前磁器で、染付や白磁、上絵付けした色絵・赤絵・金彩などがあります。

輸入陶磁器には中国産青磁の皿・香炉、青花の碗・皿・鉢、宜興窯の製品では茶罐や蓋、朝鮮産の鉢、ベトナム産の白磁碗・長胴瓶、タイ産の四耳壺などもみられます。中国産の青花には明代末期の芙蓉手碗、呉須赤絵の鉢などが含まれます。

陶磁器から見た公家の生活 これらの品々の特徴は、古くからの伝統と最新の流行を示すものが混在していることです。古いものには、15世紀後半の中国の龍泉窯青磁や天目茶碗、桃山時代の唐津の沓茶碗、志野の香炉などがあります。一方、新しいものには、宜興窯の紫泥茶罐や肥前色絵磁器などがあげられます(写真3)。

では陶磁器から公家の生活を想像してみましょう。

まず、五揃いの肥前金彩碗に目とまります。口縁がすべて端反

りで、特徴的な形をしていて、染付の花紋に金と赤の上絵付けがされています。特別の祝い事で使われたものでしょう(写真4)。

五・十・二十客の碗・皿・坏や大皿があります。その数から、広間で多勢の客をもてなす暮らしぶりが想像できます(写真5)。

肥前の錆釉染付皿は、高い高台をもっています。円窓の絵柄は皿の中に別の空間をみる意匠です。また、華やかな肥前の色絵の壺や鉢が目を引きまます。調度品として床の間などに飾ってあったものかも知れません(写真6・7)。

茶器関係では茶入が多くあり、中国産もみられます。また、香炉、沓茶碗などは桃山時代以来の「茶の湯」の品々です(写真8)。

一方で、宜興窯の製品から当時の最先端であった煎茶文化をいち

早く生活の中に取り入れたハイカラな一面もみえてきます。また、東南アジア産の碗や壺などからは、外国の文化や異国への強い憧れも感じられます。

また、調理用具はわずかに播鉢のみですが、瓶・徳利や壺・甕など、平素の食生活を支える台所の姿を垣間見ることができます。

公家の生活は、桃山時代以来のわび茶やそれ以前の書院茶、あるいは最新の煎茶、流行の最先端である伊万里の調度品としての色絵の壺や鉢、また輸入の品々など多彩な陶磁器に囲まれていました。

これらの陶磁器は、古くからの伝統を重んじながらも、中国や東南アジアなどの最新の流行を感受する公家の生活の一端を示していると思います。

(小檜山 一良)

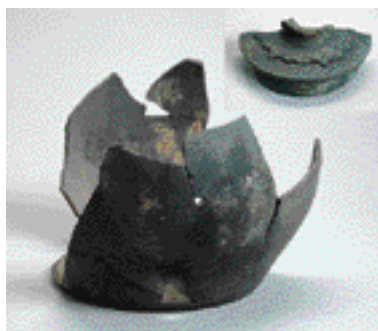


写真3 宜興窯 茶罐と蓋



写真8 茶器